

【書評】

武内佳代著

『クィアする現代日本文学 ケア・動物・語り』

山根 由美恵

(山口大学 講師)

本書はクィア批評を中心とし、金井美恵子・村上春樹・田辺聖子・松浦理恵子・多和田葉子のテキスト分析を行っている。クィアには二つの相反する指向性（当事者の「差異の主張」と「普遍性およびそれに基づく連帯」）がある。「差異の主張」とは当事者が非規範的なセクシュアリティまたはジェンダーを主体化し、差異を主張する、という対抗的なアクティヴィズムの指向性、「普遍性およびそれに基づく連帯」とは二元的なアイデンティティ・カテゴリーの輪郭線そのものを問い直すことによって、普遍性に基づく連帯を図る思弁的な連帯、である。クィア批評もこれら二つの指向性を有し、非規範的なセクシュアリティまたはジェンダーを主体化した者のアイデンティティに焦点を当て、抑圧や抵抗のせめぎ合いを見出すアクティヴィズム的な指向性と既存のカテゴリー化されたアイデンティティを切り崩すような表現を見出そうとする思弁的な指向性があると解説している。著者の独自性として、これらクィア批評の二つの指向性が私たちの「読み」そのものと同じ性質を持つと捉えた点がある。「ときに現実の世界からも飛翔して、相矛盾する言葉たちを同時に抱え込み、さらに、誰が、いつ、どのように読むかによって意味内容を大きく変容させる、まったくもって割りきれない小説という表現は、読み手に、人間存在の差異を指し示すと同時に、にもかかわらず、その差異を形作る境界線そのものを問い直させる契機を有してもいるのではないか。」(p17)。小説を読む際のダイナミズムを伴うパフォーマンス的な行為がこの相反する二つの指向性と類似性を持つという考えに、私も首肯する。

私事だが、2年生向けの授業で中心軸に「愛」が関係するテキストを紹介している。私が意識的に行っているのは、価値観が変化する（作り上げられる）こと、自分自身の思考の「枠」を可視化させ、その「枠」外の価値観をどのように捉え直すか考えさせること、である。本書で紹介されている「ジョゼと虎と魚たち」は最初に紹介している。そこではステレオタイプで各人がイメージ化（それはメディアが作り上げるものと強く関係している）障害者というイメージを崩し、一人の人間として捉え直すとともに、障害者差別の現実を自覚させた上でその問題を再考させている。同様に「コンビニ人間」における破壊的な形で「普通」という価値観を切り崩す姿を紹介している。各人で反応が真っ二つに分かれることも多く、そうした解釈に至った過程が書かれたミニレポートを読むのが楽しみでもある。そうした読みのダイナミズムを引き出す上で、既存のカテゴリー化されたアイデンティティを切り崩すような「愛」が描かれたテキストは扱いやすく、その意味で間接的にクィア批評を導入した授業を行っていたのかなと感じることができた。以下、本書の掲載順に各

章を紹介したい。

第一章は、金井美枝子「兎」論である。1970年代初頭に描かれた幻想的なグロテスクな小説群の一つとして紹介されているが、私は初読のためインパクトのあるあらずに驚愕した。兎を（屠殺）して食べる者＝男性、殺され食べられる者＝女性とし、それは父親と少女の間の近親相姦的な性暴力の象徴と捉えた上で、少女が兎を殺して食べる行為は快楽的に自己投射し続ける作業であるとした（少女が父親に殺されることを欲望する）。しかし、この行動が逆に父の死を呼ぶ展開には、兎に象徴されている女性ジェンダーのパロディ的逸脱があると読み取る。そして、語り手「私」の無性に着目し、性別二分法そのものをすり抜けるクィアな様態があると結論づけている。

第二章・第三章・第四章は村上春樹に着目したものであり、量的に三分の一を有する本書の柱とも言える。第二章「ノルウェイの森」は男性側（主人公「僕」）の異性愛中心に読解されてきた研究状況に対し、直子・レイコさん側から読み直した先鋭的な論である。著者は直子の不能が姉への性的欲望という二重の禁忌（近親相姦・同性愛）に基づくものである点、レイコさんと直子の関係のレズビアン性を指摘する。また、レイコさんが過剰に嘘をつく点（語り／騙り）にレズビアンの美少女との類似性と分身性を述べ、直子へのレイコさんの欲望が「僕」を操作していると分析する。これまでの「ノルウェイの森」研究で見落とされていた視点であり、斬新な解釈である。ただ、素朴な感想を述べるならば、直子がキズキよりも姉の方をより愛していたという点やレイコさんの手紙が直子を独占したいという「騙り」の戦略であるというところは、そう言い切れるのか、異性愛中心ではないという視点を積極的に進める方向性が強いのではないかと疑問を持つところがあった。しかし、本論は「ノルウェイの森」研究において必読の論であることは疑いがない。

第三章「レキシントンの幽霊」は、執筆時期である1990年代前半のエイズパニックというゲイ男性にとって過酷で差別的な同時代コンテクストを導入した画期的な論である。ケイシーはジェレミーだけでなく、父に対しても同性愛的思慕を持っていたこと、主人公「僕」の潜在的な同性愛志向を指摘している。1996年にエイズに対しての治療法が確立したことでエイズをめぐる環境は劇的に変化する。そうした状況を鑑み、「エイズパニック時代のアメリカのゲイ男性の過酷な記憶を浮かび上がらせると同時に、エイズパニック下のゲイ男性たちとそれを記憶／記憶する非当事者の関係性を改めてあらわにし、問い直す小説としても位置づけられる」（p119）とし、同時代には類のない日本語のエイズ文学として積極的な価値付けを行っている。本論は「レキシントンの幽霊」の新たな価値を見出した卓越した論と言える。ただ、拙論において村上と父との関係について触れており、¹「レキシントンの幽霊」はエイズ文学のみならず「父」との関係においても重要なテキストであり、テキスト分析は様々な方向性があるとも考えている。

第四章「七番目の男」は村上関連の三章の中で最も挑戦的な論である。友人「K」は主人公「私」の分身的存在であり、「K」が生み出された理由として幼児期に性的加害があったとし、津波とはそうした性加害のメタファーであり、そのトラウマと向き合う物語として読むというものである。著者自身が「恣意的で、牽強付会の誹りを免れないだろう」と述べるように、本文に記された記述と

¹ 山根由美恵「曖昧さという方法—村上春樹「レキシントンの幽霊」論—」（『国文学攷』2012・6）→『村上春樹（物語）の行方—サバルタン・イグザイル・トラウマ—』（ひつじ書房・2022）所収

離れた解釈となっている。『日本近代文学』において書評を担当した山崎眞紀子氏も本書を「何一つ不足しているものがない」画期的な書と述べてつつも、本章のみ「無理を重ねている感が否めない」と記している。²村上文学の表象をメタファーとして捉える解釈は私も複数回行っているが、津波を性加害のメタファーとした場合、本作で描かれている津波という災害に際し、自身の命を守ることを優先して結果的に大切な人を死なせてしまった罪障感という重要な主題がかすんでしまうことになる。テーマでテキストを分析することは書の統一性には重要であるが、それは程度があるのではないかと感じるころがあった。また、先行研究を網羅的に見ていると言えない面もある。村上研究のマイナスの面であるが、一部の先行研究（閲覧しやすい研究）の引用が繰り返される傾向があり、本書もそれに該当している。私は本書で扱った「ノルウェイの森」「レキシントンの幽霊」「七番目の男」に関して論考を発表しているが、それが反映されていなかったことは少し残念に感じた。

第五章は田辺聖子「ジョゼと虎と魚たち」を「ケア」の倫理を軸に、ケアされる者の依存と要求（ニーズ）に着目している。1980年代の背景とテキストの描写からジョゼが「生きるに値しない生」であることを潜在的に認識し、それから逃れようともがいていた姿を読み取る。その上で、結末部のジョゼの述懐に幸福感を読み取ることが多かった先行研究に対し、幸福＝死と考えるジョゼの意識を「性愛へと参入した女性障害者の「幸福」に沈殿する、「死」にも等しい絶望的な閉塞感の顕在化」と捉える。これらの分析は私も首肯するものであり、多くの学びを得た。私は本作の授業を行っているが、映画（平成）とアニメ（令和）の変化（意識の変遷）を紹介しており、そのうちの一つとしてアニメ版における経済的自立の面に着目している。アニメ版はハッピーエンドになっておりやや物足りない点があるが、女性障害者の経済的自立という点で健常者の恒夫とより対等な関係になっており、それが令和における差別に対しての意識変化の反映の現れであると考えている。将来、機会があれば論文化したい。

第六章は松浦理恵子「犬身」に描かれた、主人公房恵の「体は人間、魂は犬という「種同一性障害」に伴う「犬化願望」と「ドッグセクシャル」という設定についてクィア批評からの分析を行っている。著者は「ドッグセクシャル」を皮膚感覚的な快楽を得たいというセクシャルな欲望よりも、手厚く世話（ケア）されたい欲望の部分が強いと捉える。その上で、房恵の「犬化願望」の内実はケアされる対象であると同時に、ケアする主体になれるという相互ケアの喜びを欲していると分析する。また、「動物」性について、人間とは異種である「犬」の「伴侶種」（ハラウェイ：愛情で結ばれつつ、人間ではない「他者」である）性に着目した。結論として「犬身」は、性別二分法を超えつつ、女性同士の愛情関係でもあるという複雑で両義的なクィアネスというケアの倫理関係を表象している先鋭的なテキストであると述べている。

第七章（最終章）は多和田葉子「献灯使」である。震災後文学としての先行研究が進む中、著者は「ケア」の意識に着目している。放射能汚染により子どもが障害を持つことが常態となり、祖父である義郎が孫の無名のケアをしている。義郎は無名の障害に心を痛めるが、それが当然の状態

² 山崎眞紀子「書評 武内佳代著『クィアする現代日本文学 ケア・動物・語り』」（『日本近代文学』2023・11）

ある無名にとってはネガティブなものではない。義郎は無名の足が蛸のような状態になっているのも逆の進化かもしれないというような意識変化を行うようになるが、著者は「内面化した既存の人間中心主義、健常主義の思考方法に疑いを向け、そうした思考から脱却しようとする大きなパラダイムチェンジを看取できる」（p238）と述べている。また無名の世代の子どもが誰でも性転換が自然に行われるいわば無性性に繋がる設定について、「未来」と子どもを結びつけない未来主義を問い直す表象であるとする。そして、無名の命のありようが留保されている結末を、決定不可能な出発の留保により「献灯使」として子どもたちに未来を託そうとする未来主義に供するものでもなく、命が消えたという解釈に限定されない「開かれた」解釈であると結論づけている。

村上関連の三章は少し辛めの眼差しになってしまったが、本書は一つ一つの論の濃度が濃く、こうした斬新で研究を切り拓く重量を持った論を書いてみたいと何度も思わされた良書である。